

掲示板のことば

仏が光を
放つの
ではなく
光が
仏である

安田理深

2021. 05

真宗大谷派では有名な、安田理深という、僕にとって大切な先生の言葉です。浄土真宗のご門徒さんならご存知かと思いますが、お内仏（お仏壇）に掛かっている御本尊は、阿弥陀如来の絵像ですね。その阿弥陀如来は、身体全体から光を放っているように描かれています。ですから、私たちは、阿弥陀如来が光を放って、迷える私たちを照らしてくださるのだと受け取ってしまいます。

それは間違いではないのだと思います。一旦は、そのように描かれます。

でも、本当にこの私にまでその光が届いたのであれば、それは、光という形をとって、私に仏（ぶつ）そのものがはたらいたのだと受け取るのです。つまりそのはたらき、光そのものが仏（ぶつ）なのです。

光が私たちを照らすということは、ありのままの私が知らされることです。

光に照らされたからといって能力が上がるわけでもありませんし、病気が治ったりはしません。苦しみが取り除かれることもありませんし、人生が劇的に良い方向に転換するようなこともありません。

太陽に照らされて、私たちは月の姿を知るように、光とは照らされたものの上に、その姿、はたらきをあらわすのです。

ですから、仏がピカッと光って、その光が私たちを照らすのではなく、照らされた事実そのものが、仏の教えが私にはたらいているということなのです。教えに照らされて、本当の私と出あう。それが、私が仏に出あうという事実です。

真宗大谷派 光明寺住職 小林尚樹